

書店の変遷と今後の在り方についての研究

佐藤 匠

本論では、2000年代初期以降、ネット通販や電子書籍の普及を背景に衰退が進む書店業界について、その変遷を振り返りつつ、今後の書店の在り方について考察した。

まず、書店の歴史を紐解き、経済的観点から現状を考察すると文庫ブームの存在や1990年代までの出版業界の売上幅から不況が衰退の大きな原因として考えられないと考察した。そこで、まちづくりや他の経済的観点からインターネットの普及、大店法から大店立地法へと変わったことの影響、従来の委託（販売）制度や再販制度に基づく経営モデルの限界などが衰退の原因として挙げられることが分かった。

だが、本屋市場が衰退する一方で、代わりとして挙げられる電子書籍にも体全体の不調や著作権問題などが起こりうることが分かった。

また、地域密着型の店舗がインターネットを活用することによって全国的なファンを獲得する事例や、数十年にも及ぶ長期的な店舗運営によって「本のまち」を築き上げた書店、顧客一人一人の読書体験に寄り添う、つまり「ブックライフに寄り添う」というスローガンを掲げた書店など、新たな方法で経営している店舗も存在しており、書店にも新たな経営モデルが生まれていることが明らかになった。

これらを踏まえて、本論では、今後の本屋の在り方としては、本そのものではなく「この本屋に行きたい」といった意思を持った顧客を相手にする時代へと移行していく。各書店が独自の個性を持ち、地域のテーマパークや観光名所のように、顧客にとって訪れること自体が価値を持つという「趣味の場」としての本屋の新たな黄金期を迎える可能性があることについて指摘し、単に本を購入する場としての書店の時代は終わりを迎えたと結論付けた。